

その他

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究13
P.1-9 (2025)A 大学1年次の看護実習体験の違いによる
2年次看護実習でのコミュニケーション・スキルの状況Differences in Communication Skills in the Second-year Nursing Training
Depending on the Types of Nursing Training in the First-year of University A高桑優子*
TAKAKUWA Yuko山本哲子*
YAMAMOTO Tetsuko廣瀬允美*
HIROSE Masami西岡由香里*
NISHIOKA Yukari小元まき子*
OMOTO Makiko

要旨

【目的】1年次の臨地実習体験の違いは2年次の基礎看護実習Ⅱ(基礎Ⅱ)における学生のコミュニケーション・スキルに相違が生じるかを明らかにした。

【方法】基礎Ⅱを履修した2年生126名を対象に、1年次実習4項目、コミュニケーション・スキル(ENDCORE簡易版)6項目について調査回収し、Mann-Whitney U検定、Wilcoxon符号付順位検定で検討した。

【結果】85名を分析した結果、1年次実習体験の違いによる基礎Ⅱ実習前後のコミュニケーション・スキルに違いはなかったが、1年次「臨地実習」の学生41名は基礎Ⅱ実習前後で基本スキル「解読力」、対人スキル「自己主張」が有意に高くなった。(P<.05)

また、1年次「オンライン実習」の学生44名は基礎Ⅱ前後で基本スキル「解読力」、対人スキル「関係調整」が有意に高くなった。(P<.05)

【考察】1年次の実習体験の違いによってコミュニケーション・スキルの習得状況に違いはなかったが、1年次の臨地実習の体験は2年次の臨地実習のコミュニケーション・スキルに相違があった。

索引用語：看護学生、臨地実習、コミュニケーション・スキル

Key words：Nursing students, practical training, Communication Skills

1. 研究背景

「COVID-19」は2019年以降全世界に感染拡大し臨地実習を行う看護系大学は、臨地実習の中断と縮小などの影響を受けた。日本看護系大学協議会が2020

年10月に実施した「2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査」¹⁾では、2020年度9月以降に開講予定の大学の臨地実習2,140科目中、臨地実習の「変更がある」科目は83.4%とほとんどの実習科目で影響が見られた。同じく2020年10月に文部科学省が実施した「新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等の実施状況調査」²⁾では臨地実習が実施できないこと

* 順天堂大学保健看護学部

* Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing

による代替措置の実施状況として、大学の 289 課程のうち「一部の実習科目で講じた」のは 57.1%、「すべての実習科目で講じた」のは 40.1%となっており、多くの大学で学内実習や演習、オンライン実習、課題学習を行い、学生・教員による模擬患者やシミュレーターや模型人形を使用し、臨地実習に代わる手段で実習を実施していた。

また、新型コロナウイルス感染拡大下で 3 年次の看護学実習に臨む学生の思いについて調査した結果では³⁾「感染予防を徹底できるのか」「実習は受け入れられるのか」などの不安や、学内実習・オンライン実習に関し 85%以上の学生が「看護技術に自信がない」「看護過程ができるか」「コミュニケーションが取れるか」「看護職としての今後」など臨床での経験不足や実習内容への不安を感じていたとの報告があり、看護技術の体験以外にコミュニケーション・スキルに不安があることが示された。

コロナ禍における成人看護学慢性期実習において臨地実習と学内実習を体験した学生が学びと認識している内容を質的に分析した野村他の結果では⁴⁾、「慢性疾患患者の理解」「看護上の問題点・患者のニーズの理解」「主体的に学び続ける姿勢・看護観の確立」を両方の実習で学びとして認識していたが、「患者とのコミュニケーション」は臨地実習でのみ抽出された学びであったと報告されており、このことから初学者の実習目標である患者とのコミュニケーションの学びを臨地実習で行う意義は大きいと考える。

A 大学では 1 年次後期に基礎看護実習 I（1 単位）の臨地実習を行い、病院における多職種連携や看護の実際を見学し、患者・家族とのコミュニケーションをとることを通して看護の機能と役割について理解を深める実習を実施している。2021 年 4 月に入学した 1 年生は 2022 年 1 月に無作為の前後半グループに分けて 5 日間の臨地実習が計画されていたが、第 6 波による「まん延防止等重点措置」が全国の都道府県へと拡

大して発令された結果、前半グループは【臨地実習】で実施し、後半グループは【オンライン実習】に代替して行うことになった。

その後 2 年次には 8 月から 4 週間を前後半のグループに分け、2 単位の基礎看護実習 II（以降基礎 II とする）を行った。「入院生活を送っている患者の健康障害および治療、生活状況を理解し、患者の状況に応じた生活援助を実践する」「看護チームの一員として看護職者に求められる役割と倫理的姿勢を身につける」を実習目的として患者の生活行動に関する看護過程を展開し援助実施した。

本研究では、この学生たちが 1 年次の【臨地実習】【オンライン実習】の体験の違いで次に行われた基礎 II においてコミュニケーション・スキルに相違が生じたかを基礎 II の実習前後に実施した質問紙調査で明らかにすることを目的とする。これらの結果から今後の臨地実習におけるコミュニケーション・スキル獲得に向けた実習方法や学習支援の在り方を検討する。

II. 研究目的

1 年次の臨地実習体験の違いは 2 年次の基礎看護実習 II（基礎 II）における学生のコミュニケーション・スキルに相違が生じるかを明らかにする事である。これにより今後の臨地実習におけるコミュニケーション・スキル獲得に向けた実習方法や学習支援の在り方を検討する。

III. 用語の操作定義

1. コミュニケーション・スキル：言語、非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う能力であり、本研究では学生のコミュニケーションの 6 つの能力について自覚する自信度をさす。
2. 臨地実習：学生が病院施設に赴く現地での実習。
3. オンライン実習：臨地実習の代替実習として Zoom ビデオコミュニケーションズ（以下 Zoom）を使

用し実施するリアルタイムの遠隔実習で、病院内の施設映像、看護師を含む多職種が実施する講義、DVD等の既存の映像、Zoomを使用したグループカンファレンスで学習し、学生の自宅で行う実習。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質問紙を用いた量的記述的研究

2. 調査期間

2022年9月2日～9月22日

3. 研究協力者

2022年9月現在、A大学保健看護学部にて在籍し、基礎Ⅱを履修した2年生126名（男性9名、女性117名）を対象とした。

4. データの収集方法

1) 調査方法

基礎Ⅱの実習前と実習終了後に履修学生126名に学生が入学時から授業で活用しているポータルシステムである「JUNTENDO PASSPORT」⁵⁾を使用し、質問紙調査を依頼し、Google Forms（無記名）を使用し回答を回収した。

2) 調査内容

(1) 実習前質問紙

- ・学生の属性：1年次の実習に関すること4項目
- ・コミュニケーション・スキル（ENDCORE簡易版）6項目

(2) 実習終了後質問紙

- ・学生の属性：2年次の実習に関すること1項目
- ・コミュニケーション・スキル（ENDCORE簡易版）6項目

以上について調査を行った。これらの項目について選択及び4～5段階リカート尺度を用い実施した。

3) コミュニケーション・スキル（ENDCORE簡易版）について⁶⁾⁷⁾

本尺度は藤本・大坊が作成したENDCOREsの簡易版「ENDCORE簡易版」である。ENDCOREsは言語、非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う能力であるコミュニケーション・スキルを6つのスキル「自己統制」「表現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」に分解して測定する尺度であり、信頼性妥当性を確保した24項目の尺度である。「かなり得意」7点、「得意」6点、「やや得意」5点、「ふつう」4点、「やや苦手」3点、「苦手」2点、「かなり苦手」1点で点数化し、得点が高いほどコミュニケーション・スキルが高いと判断できる。コミュニケーション・スキルは自己を中心とした基本スキルである「自己統制」「表現力」「解読力」と対象の拡大を根拠とした対人スキルである「自己主張」「他者受容」「関係調整」の2つの階層を持ち、対人スキルは基本スキルより高次のコミュニケーション・スキルと考えられている。また他者を理解する力「解読力」と受容する力「他者受容」を【反応系】、表現する力「表現力」と主張する力「自己主張」を【表出系】、自分を制御する力「自己統制」と他者を制御する力「関係調整」を【管理系】としそれぞれの階層に各系列が配置する階層構造となっている。

5. 分析方法

質問紙の数量データはSPSS Statistics ver.27を用い記述統計を行った。分析データは正規性が確認できなかったため1年次の【臨地実習】【オンライン実習】の実習体験とコミュニケーション・スキルのグループ間比較はMann-Whitney U検定で分析した。また、基礎Ⅱ前後間比較は2群間の対応のあるデータであったためWilcoxon符号順位検定で分析した。データは中央値と四分位範囲で示し、統計的有意差は5%未満と

し記載した。ENDCORE はリカート尺度であることから、比較のため先行研究⁶⁻¹¹⁾と同様に平均値と標準偏差も算出した。

6. 倫理的配慮

調査は基礎Ⅱ実習前と実習後の 2 回に分けて実施し、回収は各自が無記名で Google Forms に入力し自由意思の選択が可能となる配慮を行なった。実習指導と評価を行わなかった他領域の教員によって回答を連結後、個人情報部分を削除し個人が特定できないよう仮名加工情報としてデータ化し、匿名性を確保した。調査の説明文には、本調査結果が今後の授業の改善に役立てるための資料として集計され、個人が特定できない方法で分析されること、実習の成績とは無関係であることを明記し、強制力は働かない状況で実施した。また、成績確定後に収集したデータを分析した研究であり、学生の成績に影響がない状況であった。オプトアウトの書面に対象者への説明を明記し、途中辞退の機会を確保した。なお、本研究は順天堂大学保健看護研究等倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号：4-24)

V. 結果

1. 対象者の基本属性

基礎Ⅱを履修した 2 年生 126 名(男性 9 名、女性 117 名)の対象者のうち基礎Ⅱ前後共に回答したのは 85 名(回収率 67.5%)であった。

1 年次の実習体験は【臨地実習】は 41 名(48.2%)、【オンライン実習】は 44 名(51.8%)で割合はほぼ同率であった。

2. 対象者全体のコミュニケーション・スキル(表 1)

基礎Ⅱ実施前後に共通し最も平均値が高かったのは「他者受容」、次いで「関係調整」であり、共通して低かったのは【表出系】の「表現力」と「自己主張」であった。基礎Ⅱ実施前後のコミュニケーション・スキル平均値は全ての項目で実施後の得点が高く、Wilcoxon の符号順位検定の結果では「解読力」基礎Ⅱ実施前：5.00/4.0-6.0(中央値/四分位範囲)、実施後：6.00/5.0-6.0($p=.005$)、「他者受容」基礎Ⅱ実施前：6.00/5.0-6.0、実施後：6.00/5.0-6.5($p=.010$)、「関係調整」基礎Ⅱ実施前：5.00/4.0-6.0、実施後：6.00/5.0-6.0($p=.017$)に有意差があった。

表 1 対象者全体の ENDCORE 基礎Ⅱ前後比較

	基礎Ⅱ実施前 (n=85)		基礎Ⅱ実施後 (n=85)		P値
	中央値(四分位範囲)	平均値(SD)	中央値(四分位範囲)	平均値(SD)	
自己統制	5.00 (4.0-6.0)	5.1 (1.1)	6.00 (4.0-6.0)	5.3 (1.2)	.229
表現力	4.00 (4.0-6.0)	4.5 (1.3)	5.00 (3.5-6.0)	4.5 (1.4)	.917
解読力	5.00 (4.0-6.0)	5.1 (1.0)	6.00 (5.0-6.0)	5.5 (1.1)	.005***
自己主張	4.00 (3.5-6.0)	4.5 (1.3)	5.00 (4.0-6.0)	4.7 (1.3)	.116
他者受容	6.00 (5.0-6.0)	5.5 (1.1)	6.00 (5.0-6.5)	5.7 (1.0)	.010***
関係調整	5.00 (4.0-6.0)	5.3 (1.1)	6.00 (5.0-6.0)	5.6 (1.1)	.017**

Wilcoxon の符号順位検定 $p<.05$ ** $p<.01$ ***

3. 1年次の実習体験による基礎IIでのコミュニケーション・スキル (表2、3)

1年次【臨地実習】【オンライン実習】の実習体験とコミュニケーション・スキルのグループ間比較では基礎II実施前の比較も実施後の比較もすべてのスキルで有意差はなく、1年次の実習の違いによるコミュニケーション・スキルは基礎II前、基礎II後も違いは見られなかった。

【臨地実習】【オンライン実習】それぞれの基礎II前後間比較では【臨地実習】群は「解読力」基礎II実施前：5.00/4.0-6.0 (中央値/四分位範囲)、実施

後：6.00/4.5-6.0 ($p=.049$)、「自己主張」基礎II実施前 4.00/3.0-5.0、実施後：5.00/4.0-6.0 ($p=.030$) に、そして【オンライン実習】では「解読力」基礎II実施前：5.00/4.0-6.0、実施後：6.00/5.0-6.0 ($p=.036$)、「関係調整」基礎II実施前：5.00/4.0-6.0、実施後 6.00/5.0-6.0 ($p=.044$) に有意差があった。

VI. 考察

1. 対象者全体のコミュニケーション・スキルの状況
調査対象となった基礎IIを実施した学生のコミュニケーション・スキルの得点分布は「他者受容」と「関

表2 1年次実習の体験別のENDCORE基礎II前後比較【臨地実習】群

	基礎II実施前 (n=41)		基礎II実施後 (n=41)		P値
	中央値(四分位範囲)	平均値 (SD)	中央値(四分位範囲)	平均値 (SD)	
自己統制	5.00 (4.0-6.0)	5.1 (1.1)	5.00 (4.0-6.0)	5.2 (1.2)	.383
表現力	4.00 (3.5-6.0)	4.5 (1.3)	4.00 (4.0-5.0)	4.5 (1.3)	.987
解読力	5.00 (4.0-6.0)	5.2 (1.1)	6.00 (4.5-6.0)	5.5 (1.0)	.049**
自己主張	4.00 (3.0-5.0)	4.5 (1.4)	5.00 (4.0-6.0)	4.9 (1.2)	.030**
他者受容	5.00 (5.0-7.0)	5.5 (1.1)	6.00 (5.0-7.0)	5.8 (1.1)	.064
関係調整	5.00 (4.5-6.0)	5.4 (1.1)	6.00 (5.0-6.0)	5.6 (1.1)	.167

Wilcoxon の符号順位検定 $p<.05^{**}$

表3 1年次実習の体験別のENDCORE基礎II前後比較【オンライン実習】群

	基礎II実施前 (n=44)		基礎II実習後 (n=44)		P値
	中央値(四分位範囲)	平均値 (SD)	中央値(四分位範囲)	平均値 (SD)	
自己統制	5.50 (4.0-6.0)	5.2 (1.1)	6.00 (4.3-6.0)	5.3 (1.1)	.386
表現力	4.00 (4.0-6.0)	4.5 (1.3)	5.00 (3.0-6.0)	4.5 (1.5)	.93
解読力	5.00 (4.0-6.0)	5.1 (1.0)	6.00 (5.0-6.0)	5.4 (1.1)	.036**
自己主張	5.00 (4.0-6.0)	4.6 (1.2)	5.00 (4.0-6.0)	4.6 (1.4)	.93
他者受容	6.00 (5.0-6.0)	5.4 (1.0)	6.00 (5.0-6.0)	5.7 (1.0)	.079
関係調整	5.00 (4.0-6.0)	5.2 (1.2)	6.00 (5.0-6.0)	5.5 (1.0)	.044**

Wilcoxon の符号順位検定 $p<.05^{**}$

係調整」が他のスキルより高かった。先行研究である一般大学生、社会人、看護学生初年次生を対象にした調査で看護学生は他の対象者に比較し管理系スキルと反応系スキルの「自己統制」と「関係調整」「読解力」と「他者受容」が高く、看護師を志す集団の特徴として自らを律し、他者の発言に耳を傾けて受容すると共に、他者との関係を適切に調整することができるものが多いと述べており⁸⁾、その特徴と合致していた。

そして基礎Ⅱ実施後に「関係調整」「読解力」「他者受容」が他のスキルに比べて有意に高くなっていた。基礎Ⅱ実習という臨地実習体験が対象である患者を理解し、患者を受容するスキルを学習し、高めたといえる。本調査での評価は主観評価であり、学生自身が実習期間中にこれらのスキルが高まるような体験をし、「得意」と判断し、結果スキル得点が高まったといえる。

反対にスキル得点が低かったのは「表現力」と「自己主張」であった。会話を始めるといった表出系スキルが低い⁸⁾、表出系のスキルは学年が上がっても有意な差にならない⁹⁾、この傾向は 4 年次まで継続される¹⁰⁾、3・4 年生は表出系のスキルが苦手と自己評価していた¹¹⁾ように、先行研究においても看護学生はこの 2 つのスキルが低い傾向にあり、看護学生は他者受容が高く表現力や自己主張が低い傾向にあると述べられている。看護学生の特に低学年では患者の話を途中で中断することができず、決められた時間までにナースステーションに戻り指導者に報告ができない、本当は聞きたい事があっても患者の話すままに会話が進み、必要な情報が収集できなかったとの実習状況を目にする事が多くあり、表出系スキルの低さがこのようなコミュニケーションを生じさせると考える。

2. 1 年次の実習体験の違いによるコミュニケーション・スキルの相違の有無

今回は基礎Ⅱ実施前の調査、基礎Ⅱ実施後の調査ともに【臨地実習】と【オンライン実習】の実習体験の

違いでコミュニケーション・スキルに有意差はなかった。この結果から 1 年次の【オンライン実習】と【臨地実習】は学生にとって明らかなコミュニケーション・スキルの違いを生じるものではなかったと考える。

1 年次の基礎看護実習Ⅰの実習目的は「病院における多職種連携や看護の実際を見学し、患者・家族とのコミュニケーションをとることを通して、看護の機能と役割について理解を深める」とし実施された。実習前半に行われた【臨地実習】では看護師と同行実習を行いながら援助の実際や看護師が行うコミュニケーションの様子見学し、多職種との同行実習や実際に患者とのコミュニケーションから療養生活や入院の影響を考えた。

COVID-19 のため実習後半は【オンライン実習】が実施され、DVD の映像教材や病院内を案内する動画を用いて病院の構造を学習した。多職種との同行実習の代替実習として、オンラインを通じて薬剤師、管理栄養士、臨床工学士、放射線技師、社会福祉士からそれぞれの仕事内容や病院での役割について、看護に関してはがん看護 CNS、各病棟の看護師指導者から看護の役割や看護実践について臨床講義を受け、オンライン上ではあったがリアルタイムで質疑応答等を実施しコミュニケーションの機会を設けた。午後はこれらを題材にオンライン上でカンファレンスを行った。1 年次の実習目的となる病院に関する基本的な知識の習得、看護師の機能については題材となる映像教材も多くあり、多職種や看護師の臨床講義等を多く取り入れたことで実習目標を達成することができたといえる。菅原他⁹⁾は ENDOCORES の得点は対象者自身のコミュニケーション・スキルに関する「得意から苦手」という自信度を示しているとし、自信度は看護の学修が進むことで高くなると述べている。そのため 1 年次の【オンライン実習】で、単なる事例学習や映像学習だけでなく看護師をはじめとする医療現場で働く多職種の語りの声を聞く事、医療現場の実際が想像できたこと、

それをまとめてメンバー全員の前で発言の機会があった事、それらをグループ間で十分な時間を掛けて話し合った事で学びの成果があったため【臨地実習】との違いが生じなかったのではないかと考える。

3. 1年次の実習体験がベースとなりコミュニケーション・スキルを高める可能性

【臨地実習】の基礎Ⅱ前後間比較では「解読力」と「自己主張」に有意差がみられた。特に表出系の「自己主張」が高くなったことは1年次の臨地実習における体験がこのスキルを高めたのではないかと考える。コミュニケーション・スキルは階層構造となり発達することが仮定されていることから⁶⁾、1年次の臨地実習の体験が影響しているのではないかと考える。患者とのコミュニケーションの中で、適切なタイミングで的確な質問をする、患者に自分の意志を伝え表出する体験はコミュニケーション・スキルの習得となりうる。また、臨地実習では患者とのコミュニケーションから得られるものばかりではなく、看護師などの医療スタッフとのコミュニケーションからも習得される。特に基礎Ⅱでは学生自身が計画した看護ケアを実習時間内に調整し、患者の希望を確認後、指導看護師に指導を受けられるように交渉することが必要となる。1年次の患者や看護師へ自分の意見を発言した体験がベースとなり自分の考えや患者の希望を正しく表出し伝えるスキルの習得が高まったと考えた。

一方、【オンライン実習】の基礎Ⅱ前後間比較では「解読力」「関係調整」に有意差があった。「関係調整」は対人スキルにおける管理系スキルとされており、菅原他⁹⁾は2年生より4年生が有意に高く、グループやクラスの集団で学修する体験がこのスキルの自信度を高めると述べている。実習でのグループ活動の体験がないため基礎Ⅱ実施前は自信がなかったが、基礎Ⅱ実施後に、「カンファレンスでの体験を通して他者との意見や対応の違いを知ることができ」¹²⁾他者とのやり

とりを通じて調整する能力が培われたと考える。【オンライン実習】の学生は1年次の十分なカンファレンス時間の中で他者とのやりとりの体験がベースとなり、他者を制御し良好な関係を調整するスキルの習得が高まったと考える。荒木他¹⁰⁾は「他者受容」と「関係調整」は正の相関があり、学生は、相手の意見や立場を問わず、自己主張せず相手に合わせ自分が我慢するという受動的な行動によって関係を調整すると捉えている可能性を示唆し、このようなコミュニケーションをとり続けていることは問題解決に至らず自尊感情を低下させ看護師のバーンアウトの要因となることを懸念している。【オンライン実習】の学生は基礎Ⅱ前後も「自己主張」のスキルに変化がなく表出系のコミュニケーションに自信が持てないといえる。「沈黙は気まぐずいので自分からどンドン話す」¹²⁾ような学生特有のコミュニケーション傾向が見られるが、それさえも表出系スキルを刺激し高める一つの手法であると考えられるため、臨地実習での患者と関わる体験の時間をより確保する必要があると考える。

4. 看護学生のコミュニケーション・スキルを高める実習の取り組み

今回の結果から1年次の実習体験の違いにより2年次のコミュニケーション・スキルに大きな差は見られなかった。それはオンライン実習の内容や方法を工夫することにより、回避できたと考える。しかし【臨地実習】と【オンライン実習】の実習体験がベースとなり得意と感じるコミュニケーション・スキルに違いが出たことで実習の形態がコミュニケーション・スキルに影響している可能性が示唆された。先行研究^{8~13)}から看護学生は表出系のコミュニケーション・スキルは低値であることが明らかになっている。本研究で【臨地実習】の体験が表出系の「自己主張」のスキルを高める可能性があることが明らかになったため、臨地実習の機会を増やすことでコミュニケーション・スキル

の習得の機会を得られると考える。

またすべての群で「表現力」の中央値が低値であり実習前後にも変化がなかった。このことからコミュニケーション・スキルを高めるためには、表出系の上位スキルである「自己主張」ではなく下位スキルの「表現力」を優先的に刺激する。つまり相手に主張できなくても自分の気持ちをうまく表現し伝える機会を増やすことは、「自己主張」のスキルを高める前段階として有効と考える。磯野ら¹³⁾は看護学生のコミュニケーション・スキルの概念枠組みの先行要件の一つとして【周囲の環境】《相手の状態》《場面の状況》《人的環境》を挙げている。臨地実習では実習メンバーや指導者、教員、患者を含む「相手」となるものや、大学と異なる「場面」や病院などの「環境」が存在し、看護師としてのコミュニケーション・スキルの経験が学修できる場である。「表現力」「自己主張」の高い看護学生はコミュニケーションの自信度も高い¹¹⁾とされているため、臨地実習を体験することで看護師のコミュニケーション・スキルの機会を得て経験値を高め、元来得意である「関係調整」「読解力」「他者受容」のスキルを高めることでコミュニケーションに自信を持ち、このことが正のサイクルとなって苦手とされる「表現力」「自己主張」のスキル習得が高まることを期待したい。

5. 研究の限界と今後の課題

今回の調査は対象が 1 施設の学生に限定されていること、データ数が少ないことから、一般化することは難しいと思われた。また、学生の説明変数となり得るデータがなかったことから偶発的に生じた実習体験の違いによる事象や、差異に関する影響因子を分析することができなかった。しかし臨地実習はコミュニケーション・スキルを高めることに何らかの影響があることが示されたため、学生の背景や実習体験データを収集し関連を明らかにする必要がある。また今回は学生の調査の負担を考慮し、調査項目が少ない ENDCORE

簡易版で分析したが、今後はより精度が高くスキル・タイプが判断できる ENDCORES を使用しコミュニケーション・スキルを詳細に分析し、臨地実習に影響するコミュニケーション・スキルを明らかにする必要がある。

VII. 結論

1. 1 年次の【臨地実習】と【オンライン実習】の実習体験の違いは、基礎Ⅱ前後のコミュニケーション・スキルに違いを生じなかった。スキル得点中央値は対象者全体の結果と同様にそれぞれ「他者受容」と「関係調整」が高く「自己主張」が低く、先行研究と同じ結果であった。
2. 1 年次【臨地実習】の基礎Ⅱ前後間比較では「読解力」と「自己主張」に有意差がみられた。1 年次【臨地実習】を体験した学生は 1 年次の臨地実習は患者や実習指導者に対して自分の意志を伝える経験から「自己主張」のコミュニケーション・スキルに影響していた。
3. 1 年次【オンライン実習】の基礎Ⅱ前後間比較では「読解力」「関係調整」に有意差があった。1 年次【オンライン実習】を体験した学生は 1 年次にカンファレンスで話し合い、グループやクラスの集団で学修する体験から「関係調整」のコミュニケーション・スキルに影響していた。

引用・参考文献

- 1) 一般社団法人 日本看護系大学協議会活動報告書 (2021 年 4 月)：2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書 (閲覧日 2024.12.22)
<<https://www.janpu.or.jp/wp/wpcontent/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf>>
- 2) 文部科学省 (令和 2 年 10 月 1 日)：新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成

- 学校における臨地実習等の実施状況調査（閲覧日 2024.12.22）
<https://www.mext.go.jp/content/20200302-mxt_igaku-000013087_5.pdf>
- 3) 高岡寿江, 石堂たまき, 藪下八重: 新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の思い, 保健医療技術学部論集, 15, 55-68, 2021.
- 4) 野村美紀, 奥井良子, 長嶋祐子: コロナ禍における成人看護学慢性期実習の学生の学び 臨地実習と学内実習の両方を体験した学生の学びの認識, 駒沢女子大学研究紀要, 4, 59-70, 2022.
- 5) 大学ポータルシステム Universal Passport RX 日本システム技術株式会社（閲覧日 2024.12.22）:
<<https://www.jast-gakuen.com/products/unipa/unipa1/>>
- 6) 藤本学, 大坊郁夫: コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み, パーソナリティ研究, 15, 347-361, 2007.
- 7) 藤本学: コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討, パーソナリティ研究, 22, 156-167, 2013.
- 8) 藤本学, 島村美香, 小山記代子, 他: 看護学科初年次生の基本的コミュニケーション・スキルの類型論敵特徴－ ENDCOREs を用いたスキル・タイプの判定法を通して－, 日本看護学教育学会誌, 28(3), 13-25, 2019.
- 9) 管原清子, 加藤京里, 山口みのり, 他: A 大学における看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴と学年による違い, 日本看護医療学会雑誌, 24(2), 36-43, 2022.
- 10) 荒木善光, 戸渡洋子, 中村京子: 看護学生のコミュニケーション・スキルとそのスキルを活用する重要度・自信度との関連, 熊本保健科学大学研究誌, 16, 95-103, 2019.
- 11) 河内浩美, 池田かよ子: 看護学生における SOC (Sense of Coherence) とコミュニケーション・スキルの実態－実習経験別による比較－, 新潟青陵学会誌, 7(1), 57-62, 2014.
- 12) 村中陽子: 看護教育におけるコミュニケーション・スキル教授モデル開発に関する研究－看護学生のコミュニケーション・スキルの学習経験と認識の実態－, 日本看護学教育学会誌, 15(2), 25-37, 2005.
- 13) 磯野さよ子, 前田ひとみ: 「看護学生のコミュニケーション・スキル」の概念枠組み, 熊本大学医学部保健学科紀要, 19, 1-8, 2023.